

「信用と架空資本」覚え書

深 貝 善 太 郎

目 次

- I ま え が き
— 資本の商品化論と経済学的諸範疇の序列と —
- II 「信用と架空資本」論への上向と「平均利潤を生む資本」論
に内含する諸関係への下向と
— その1. 支払手段としての貨幣の機能の
発生と発展と —
- III 「信用と架空資本」論への上向と「平均利潤を生む資本」論
に内含する諸関係への下向と
— その2. 貨幣取引資本と信用と —
- IV 信用, 架空資本
— 信用, 架空資本, を支えるものと
資本主義的生産様式の内的編成と —

I ま え が き

— 資本の商品化論と経済学的諸範疇の序列と —

資本の商品化論, 平均利潤を生む資本の利子つき資本への転化論, にはじまる近代的利子および利子つき資本の理論は, ほかならぬ銀行関係, 銀行による信用の取扱関係に具体化されるところの, 利子および利子つき資本の理論である。信用制度の発展とともに, 貸付可能資本, すなわち利子つき資本たるべく豫定された資本にとっての, 投下部面である, 国債証券, 株式その他の, 架空資本形態も発展する。そして, この発行および流通市場の発展とともに, この市場を直接

に前提し、銀行を直接には前提しない、いわゆる直接金融も発展する。他方、資本主義の成熟とともに、産業資本によるこの部面での遊休貨幣資本運用、いわゆる「産業資本の〈銀行〉化」も進展し、かつ銀行の、この市場への参入形態も進化する。しかし、こうした関係に先行するところの、銀行の、貸付可能資本の形成、銀行の信用取扱関係における、また、これに先行する商業信用における、架空資本関係が、ここでの問題である。

近代的利子および利子つき資本の生産関係に、そして資本主義的生産様式に媒介されて、資本主義的貨幣・信用・銀行制度は形成される。資本主義的生産様式は自らのためにこれらの制度を用意し、これによって進行する。

展開にあたって注意しなければならないのは、この生産様式の内的編成において基礎にあるものとその基礎にあるものとの関係である。

資本の商品化論は、「完成された姿」(K. III, S. 350. ㊦(10) 1頁, ㊦(4) 421頁, ㊦(3) 419頁)の、平均利潤およびこれを生む資本の理論を直接に前提する。高利貸資本が、そして「社会主義的な意味での信用・銀行制度の奇跡的な力についてのもろもろの幻想」が、近代的利子つき資本または信用制度を、「資本主義的生産様式の諸形態の一つとしての信用制度」、「資本主義的生産様式の諸形態の一つとしての利子つき資本」、「この生産様式の信用制度の基礎としての利子つき資本」(K. III, S. 621. ㊦(10) 550頁, ㊦(5) 783 - 4頁, ㊦(4) 764頁)として特徴づける。

しかし、近代的利子および利子つき資本の生産関係、そして、資本主義的信用制度は、資本主義的生産様式がそれによって進行するために形成される。そして、信用、架空資本が、資本主義的生産様式一般を特徴づける。競争とともに信用は、利潤率の平均化を媒介するし、信用・銀行制度によって資本の分配は行なわれる。「利潤率の平均化を媒介するために、または全資本主義的生産がその上で行なわれるこの平均化の運動を媒介するために、必然的に信用制度が形成される。」(K. III, S. 451. ㊦(10) 203頁, ㊦(4) 555頁, ㊦(3) 549頁) 等量の資本には等量の利潤をという「資本の社会的性格は信用・銀行制度の十分な発展によってはじめて媒介され十分に実現される」(K. III, S. 620. ㊦(10) 548頁, ㊦(5) 782 - 3頁,

㉔(4)763頁)「銀行制度によって、資本の分配は、私的資本家や高利貸の手から、一つの特種な業務として、社会的な機能として、取り上げられている。」(K. III, S. 620. ㉔(10)549頁, ㉕(5)783頁, ㉖(4)763頁)

それでは、展開にあたって、なぜ、信用、銀行制度、そして利子および利子つき資本から入って、平均利潤や資本の生産関係に及ばないのか。「経済学的諸範疇の歩み」に関する叙述(Kr. S. 637. ㉗302-3頁, ㉘317-8頁)に照らして考察しよう。いま平均利潤を生む資本と信用制度、利子つき資本との関係についてみると、平均利潤を生む資本の生産関係の十分な発展は、信用制度の十分な発展によってはじめて媒介されるのであるから、それに、信用制度、利子つき資本は、すべての資本に結びついており、またすべての資本の最初の形態——貨幣資本——に結びついているから、信用制度、利子つき資本からはじめることが一番自然なことのようと思われる。しかし、これは間違いであろう。信用制度、利子つき資本の生産関係が他の資本関係に順位と影響力とを及ぼすということは、資本主義的生産様式のどの部面にもあることである。しかし、信用制度は商品としての資本なしには理解できない。そして、商品としての資本は、完成された姿の、平均利潤およびこれを生む資本なしには理解できない。そして、平均利潤およびこれを生む資本は、資本の生産関係なしに理解できない。しかし、資本の生産関係のほうは、平均利潤およびこれを生む資本の生産関係なしでも、そして平均利潤およびこれを生む資本の生産関係のほうは、商品としての資本の生産関係なしでも、そして商品としての資本の生産関係のほうは、信用制度なしでも、理解できる。つまり、「経済学的諸範疇の順序は、それらが近代ブルジョア社会で互いにもっている関係によって規定されているのであって、この関係は、諸範疇の自然的順序として現われるものや歴史的順序に対応するものとは、まさに逆である。……問題は、近代ブルジョア社会のなかでのこれら諸関係の編成なのである。」(Kr. S. 638. ㉗304-5頁, ㉘319頁)

さて、「商品としての資本」または「資本としての商品」として、近代的利子つき資本は規定される。この規定段階では、銀行関係、銀行による信用の取扱関

係は捨象されている。そこでは、利子つき資本、またはこれに転化する筈の平均利潤を生む資本としてあらわれるものは、「貨幣——ここではある価値額の独立の表現として考えられるもので、この価値額が実際に貨幣として存在するか商品として存在するかにはかかわらない——」（K. III, S. 350, ㊤(10) 2頁, ㊤(4) 422頁, ㊤(3) 419頁）である。ある価値額は「資本として貸付けられる商品」として現われる場合、つねに貨幣形態で現われるとは限らない。しかし、「すべて貸付けられる資本は、その形態がどうであろうと、またその使用価値の性質によって返済がどのように変形されようとも、つねにただ貨幣資本の特殊な一形態でしかない。なぜならばここで貸付けられるものは、つねにある一定の貨幣額であって、利子もまたこの額にたいして計算されるのだからである。」（K. III, S. 356. ㊤(10) 14頁, ㊤(4) 429頁, ㊤(3) 427頁）

こうして、「資本としての商品」論展開にあたって取扱われるものは、「ただ本来の貨幣資本——そのほかの貸付資本の諸形態はこの貨幣資本から派生したものである——だけである。」（K. III, S. 356. ㊤(10) 15頁, ㊤(4) 430頁, ㊤(3) 427頁）

しかし、そこで取扱われるものはただ本来の貨幣資本だけであるといっても、「貨幣——ここではある価値額の独立の表現として考えられるもので——…」から明らかのように、そこでは、「循環の一般的形態を考察するにあたって、貨幣を金属貨幣と考え、……象徴貨幣、単なる価値表章を、そして……信用貨幣を除外」（K. II, S. 116. ㊤(5) 215頁, ㊤(3) 138頁, ㊤(2) 129頁）したように、また、さかのぼっては「貨幣または商品流通」、「価値の尺度」、のところで「金を貨幣商品として前提」（K. I, S. 109, ㊤(1) 299頁, ㊤(1) 125頁, ㊤(1) 123頁）したように、貨幣の諸形態、貨幣の種類は捨象されている。

現実の流通過程においてであるか、独特の流通過程においてであるか、流通貨幣資本としてであるか、利子つき貨幣資本としてであるか、何れにせよ、そこに現われる貨幣は、本来の貨幣として単純化されている。そして、商品としての資本の所有者として現われるものは、ただ、所有者——貸付資本がその所有者と産業資本家とのあいだで行なう運動」（K. III, S. 362. ㊤(10) 27頁, ㊤(4) 437頁,

㊦(3) 435 頁)——として単純化されている。こうした単純化のもとでの、近代的利子つき資本の、「商品としての資本」または「資本としての商品」規定、である。

それが、利子なる増加価値をもたらすという、この「商品」の「所有者自身のための使用価値」において、高利貸資本と近代的利子つき資本とは異なるところはない。それが、平均利潤を生む資本であるという、この「商品」の「他人のための使用価値」が、近代的利子つき資本を規定する。近代的利子つき資本に高利貸資本を対比するとき、近代的利子つき資本は、「資本主義的生産様式の諸形態の一つ」としての特徴も明らかとなるが、これの、「他人のための使用価値」、
「社会的使用価値」は、高利貸資本におけると違って、貨幣が貨幣としてもつ使用価値にではなく、貨幣が資本主義的生産の基礎上でうけとる、利潤——平均利潤——を生産するための手段としての追加的使用価値に、もとめられなければならない。

しかし、かくして、近代的利子つき資本は、「商品(独自の種類の商品=利子つき資本)化された貨幣(資本としてのではない単なる貨幣)」としてではなく、「商品(独自の種類の商品=利子つき資本)化された資本(平均利潤を生む資本)」としてとらえられ、平均利潤の一部としての利子の基本規定は与えられ、この商品の独自の譲渡様式や独自の価格様式やの説明は与えられ、利子と企業者利得とへの利潤の分割は説明され、「資本関係の最も外的な最も物神的な形態」(K. III, S. 404. ㊦(10) 108 頁, ㊦(4) 490 頁, ㊦(3) 487 頁)としての近代的利子および利子つき資本規定は与えられるとしても、この近代的利子および利子つき資本の生産関係は、資本主義的「信用制度とそれが自分のためにつくりだす諸用具(信用貨幣など)」(K. III, S. 413. ㊦(10) 126 頁, ㊦(4) 502 頁, ㊦(3) 498 頁)に具体化されるところのそれであり、信用、架空資本が、資本主義的生産様式一般を特徴づけることに注意しなければならない。

II 「信用と架空資本」論への上向と「平均利潤を生む資本」論に内含する諸関係への下向と

—— その1. 支払手段としての貨幣の機能の発生と発展と ——

資本の商品化論，平均利潤を生む資本の利子つき資本への転化論，にはじまる近代的利子および利子つき資本の理論は，ほかならぬ銀行関係，銀行による信用の取扱関係に具体化されるところの，利子および利子つき資本の理論である。

「商品としての資本」または「資本としての商品」論段階では，本来の貨幣資本だけが取扱われ，貸付資本のその他の形態は除外されるとともに，貨幣の種類や形態やの区別関係，代用貨幣関係は捨象され，かつ資本の所有者は，単に所有者として単純化された。しかし，資本主義的生産様式における利子つき資本の生産関係，資本主義的信用制度は，信用，架空資本の生産関係に具体化される。

そして，利子つき資本の制度，信用制度によって資本主義的生産様式は運用され，信用，架空資本が資本主義的生産様式一般を特徴づける。しかし，信用，架空資本は，「商品としての資本」または「資本としての商品」なしには理解できないし，「商品としての資本」は平均利潤を生む資本の生産関係なしに理解できない。

銀行は，資本と信用とを創造する。しかし，これの創造関係における，また創造後における，資本と信用との利子つき資本としての運動に関する考察は，そして資本の生産関係のもとでの非信用貨幣である価値表章の利子つき資本としての運動に関する考察も，さきに展開された「商品としての資本」または「資本としての商品」論に，繰り返し立ち帰ることを強制するであろう。

しかして，利子つき資本が利子つき資本であるのは，それが独特の流通過程にある限りのことである。これを平均利潤を生む資本関係が媒介する。貸付けられ，独特の流通過程を出れば，それは，平均利潤を生む資本としての機能関係に入る。そして，現実の流通過程で資本がとる貨幣形態は，流通資本としての貨幣資本である。そして，資本の現実の流通過程での，「信用貨幣の流通に関する批判的

説明は、すべて、単なる金属流通の基礎の上では事態がどのように現われるかということの考察に繰り返し立ち帰ることを……強制」(K. II, S. 116. ㊦(5) 215 頁, ㊦(3) 138 頁, ㊦(2) 130 頁) するであろう。

かくして、信用、架空資本の考察は、これまで簡単化のもとに考察された商品、貨幣、資本関係のそれに、繰り返し立ち帰ることを強制するであろう。一般的な商品流通の諸法則が、資本の流通過程に妥当するのは、資本の現実の流通過程が諸商品変態の絡み合いである限りでのことであって、それが資本の運動である限りでのことではない。しかし、単なる商品流通上の諸変態の絡み合い、資本の現実の流通過程と、そこに表現される資本関係、そして独特の種類の商品、利子つき資本の生産関係は、信用、架空資本に自己を表現し、先行する商品、貨幣、資本の生産関係は、信用、架空資本を説明するであろう。しかし、信用、架空資本そのものの説明は、これまでの簡単化のもとでの資本関係の説明とは別に、与えられなければならない。

信用、架空資本論への移行は、一つの飛躍である。なぜなら、「商品としての資本」論では、ほかならぬ「商品としての資本」関係そのもの——これはそれ自体信用である——以外のいっさいの信用は捨象され、その他いろいろな簡単化が行なわれていたのであるから。それに、商品としての資本はそのものとしては独特の流通過程にのみかかわるのであるが、信用、架空資本は、そのものとしても現実の流通過程に、そして独特の流通過程に、かかわるのであるから。

しかして、資本の商品化論にはじまる近代的利子および利子つき資本論の、¹⁾「信用と架空資本」(K. III, S. 413. ㊦(10)126 頁, ㊦(4) 502 頁, ㊦(3) 498 頁) 論への飛躍は、資本の商品化論の直接的前提であると完成姿態の平均利潤またはこれを生む資本の生産関係の、内奥に含まれる二つの生産関係、支払手段の生産関係と貨幣取引資本の生産関係とへの下向と、これからの上向の関係として現われる。「信用と架空資本」論はつぎのまがきにはじまる。すなわち、「信用制度やそれが自分のためにつくりだす諸用具(信用貨幣など)の詳しい分析は、われわれの計画の範囲にははまらない。ここでは、ただ資本主義的生産様式一般の特徴づけのために必要なわず

かばかりの点をはっきりさせておくだけでよい。そのさいわれわれはただ商業信用と銀行信用を取扱うだけにする。この信用の発展と公信用との関係は考察しないでおく。」そして、叙述は、単純な商品流通段階での支払手段としての貨幣の機能の発生関係に関する想起、信用制度の自然発生的の基礎、信用の本来の基礎、本来の信用貨幣の基礎、の指摘にはじまる。

- 1) 「信用。架空資本」または「信用と架空資本」なる表題の使い方については、大谷禎之介「〈資本論〉第3部第5篇の草稿について」『信用理論研究』第1号、1984年7月、信用理論研究会、5頁、藤塚知義「〈資本論〉第3部第5篇・信用論の理論構成の解釈について」『信用理論研究』第1号、123頁、参照。

「私は前に（第1部第3章第3節b），どのようにして単純な商品流通から支払手段としての貨幣の機能が形成され，それとともに商品生産者や商品取引業者のあいだに債権者と債務者との関係が形成されるか，を明らかにした。商業が発展し，ただ流通だけを念頭において生産を行なう資本主義的生産様式が発展するにつれて，信用制度のこの自然発生的な基礎は拡大され，一般化され，完成されて行く。だいたいにおいて貨幣はここではただ支払手段としてのみ機能する。すなわち，商品は，貨幣と引き換えにではなく，書面での一定期日の支払約束と引き換えに売られる。この支払約束をわれわれは簡単化のためにすべて手形という一般的な範疇のもとに総括することができる。このような手形はその満期支払期日まではそれ自身が再び支払手段として流通する。そして，これが本来の商業貨幣をなしている。このような手形は，最後に債権債務の相殺によって決済される限りでは，絶対的に貨幣として機能する。なぜならば，その場合には貨幣への最終的転化は生じないからである。このような生産者や商人どうしのあいだの相互前貸が信用の本来の基礎をなしているように，その流通用具，手形は本来の信用貨幣すなわち銀行券などの基礎をなしている。この銀行券などは，金属貨幣なり国家紙幣なりの貨幣流通にもとづいているのではなく，手形流通にもとづいているのである。」（K. III, S. 413. ㊦(10)126 - 7頁, ㊦(4)502 - 3頁, ㊦(3)498頁）

信用貨幣を象徴貨幣とともに，度外視し，金属貨幣だけを想定しても，忘れて

ならないことは「貨幣流通は、金属貨幣がその鑄貨機能では他の材料から成っている表章または象徴によって置き替えられるという可能性を、潜在的に含んでいる」(K. I, S. 140. ㊶(1) 365 頁, ㊵(1) 164 頁, ㊷(1) 163 頁)ということ, そして「忘れてならないのは、金属貨幣は、購買手段としても支払手段としても機能することができるということである。」(K. II, S. 116. ㊶(5) 215 - 6 頁, ㊵(3) 138 頁, ㊷(2) 130 頁)しかして支払手段としての貨幣の機能の発生関係に、「信用制度の自然発生的の基礎」はもとめられる。

発展した信用関係のもとでは、商業信用は銀行業信用に、商業手形関係は銀行手形関係に、覆われる。しかし、展開された資本主義的信用から銀行業信用、銀行の取扱う信用関係を捨象すると、残るものは、純粋に考察された、商業信用および貨幣取引資本である。

資本主義的信用の内的編成関係において、商業信用は銀行業信用に先行する。商業信用、商業手形関係の十分な発展は、資本主義的商品生産そのものの発展に媒介される。そして、産業者や商人たちの出納代理人であり、債権債務関係の集中決済処理機関でもある貨幣取引資本の、そして貨幣取引に結合して貸借と信用の取扱いとを併せ営む銀行業資本または銀行組織の、発展に媒介される。しかし、貨幣取引資本、銀行業資本、銀行組織関係を捨象しても、支払手段としての貨幣の機能の発生と発展の関係、商業手形関係、それ自体に「貨幣流通の技術の発展を、すでに看取」¹⁾する。

1) 高木暢哉『信用制度と信用学説』昭和34年9月、日本評論新社、8頁。

商品流通、そして資本主義的商品流通の、発展とともに、「商品の譲渡を商品価格の実現から時間的に分離するような事情が進展」(K. I, S. 149. ㊶(1) 385 頁, ㊵(1) 176 頁, ㊷(1) 174 頁)する。単純な商品であるか、資本主義的商品であるか、何れにせよ、価格の実現が後日に延期された商品譲渡、現実の流通過程 $W - G$ または $W' - G'$ 過程に生れる信用関係において、「商品の変態または商品の価値形態の展開は変化」し、貨幣は「支払手段」として、「購買手段から区別された別の一機能」形態 (K. I, S. 149. ㊶(1) 386 頁, ㊵(1) 177 頁, ㊷(1) 175 頁)をうけ

とる。

金属貨幣のみを想定し、これから出発しよう。「貨幣の現象形態」(K. I, S. 152. ㊦(1) 392 頁, ㊧(1) 180 頁, ㊨(1) 179 頁) が本来の貨幣とは異なる場合は、これの応用問題と考えればよい。

金属貨幣は購買手段としても支払手段としても機能する。支払手段としての貨幣の機能関係というのは、商品と貨幣という二つの等価物が売りの過程の両極に同時には限られないで、「将来の貨幣」(K. I, S. 149. ㊦(1) 386 頁, ㊧(1) 177 頁, ㊨(1) 175 頁)と、現在の商品とが交換される関係である。そこでは、「貨幣は、第一には、売られる商品の価格規定において価値尺度として機能する。契約によって確定されたその商品の価格は、買手の債務、すなわち定められた期限に彼が支払わなければならない貨幣額の大きさを示す。貨幣は、第二には、観念的な購買手段として機能する。それはただ買い手の貨幣約束のうちに存在するだけだとはいえず、商品の持ち手変換をひき起こす。支払期限がきたときはじめて支払手段が現実に流通にはいってくる。すなわち買い手から売り手に移る。流通手段は蓄蔵貨幣に転化した。というのは、流通過程が第一段階で中断したからであり、言い換えれば、商品の転化した姿が流通から引きあげられたからである。支払手段は流通にはいってくるが、しかし、それは商品がすでに流通から出て行ってからのことである。貨幣はもはや過程を媒介しない。貨幣は、交換価値の絶対的定在または一般的商品として、過程を独立に閉じる。」(K. I, S. 150. ㊦(1) 388 頁, ㊧(1) 178 頁, ㊨(1) 176 頁)

将来の貨幣と現在の商品の交換、信用による商品の流通からの離脱、という表現にすでに一つの逆の表現形式をみる。信用、流通する信用の形成は、価格の実現を後日に延期された商品流通の表現でしかないのに、逆に商品流通が、信用の結果として現われる。「信用によって媒介されるものは、商品の変態であり、単にW—Gだけではなく、またG—Wと現実の生産過程とでもある」(K. III, S. 499. ㊦(10) 294 - 5 頁, ㊧(5) 616 - 7 頁, ㊨(4) 604 頁)という、発展せる商業信用関係の原型がここにみられる。これは、「流通手段としての貨幣の機能」におけると

の、すなわち「貨幣運動はただ商品流通の表現でしかないのに、逆に商品流通がただ貨幣運動の結果として現われる」（K. I, S. 130. ㊦(1) 344 頁, ㊧(1) 152 頁, ㊨(1) 151 頁）関係との、同一性からの差別性においてとらえられうるであろう。

「貨幣が流通手段として機能するか支払手段として機能するかは、商品交換の形態によることである。」(K. III, S. 328. ㊦(9) 339 頁, ㊧(4) 394 頁, ㊨(3) 390 頁) ここでは、この形態の区別が問題である。

生産者や商人たちのあいだの「信用によって媒介されるものは、商品の変態であり、単にW—Gだけではなく、またG—Wと現実の生産過程とでもある」といっても、支払手段の生産関係は、もともと「同じ取引が同じ人々のあいだに絶えず繰り返される場合」(K. I, S. 149. ㊦(1) 386 頁, ㊧(1) 176 頁, ㊨(1) 175 頁)にであって、信用の流通領域は限られている。

しかし、諸支払の集中、諸支払の決済の施設と方法、これの人工的な組織の発達、個々の手形に固有の流通領域、個々の手形に固有の諸支払の連鎖、を超えての債権債務の相殺を媒介する。

「同じ場所に諸支払が集中されるにつれて、自然発生的に諸支払の決済のための固有な施設と方法とが発達してくる。……債務差額だけが清算されればよいことになる。諸支払の集中が大量になればなるほど、相対的に差額は小さくなり、従って流通する支払手段の量も小さくなるのである。」(K. I, S. 151. ㊦(1) 390 - 1 頁, ㊧(1) 179 - 180 頁, ㊨(1) 178 頁)

しかして、手形は裏書譲渡、債権債務相殺関係において支払手段としての流通関係にあるが、かくして諸支払が相殺され支払手段の現実の流通がみられない限り、貨幣はただ観念的に計算貨幣または価値尺度として機能するだけである。この関係は、その限りで手形は絶対的に貨幣として機能すると表現される。他方、差額が現実に支払われなければならない限りでは、貨幣は、流通手段として、すなわち物質代謝のただ瞬間的な形態として現われるのではなく、社会的労働の個別的な化身、交換価値の独立な定在、絶対的商品として、現われる。諸支払が相

殺される限り、貨幣はただ観念的に計算貨幣または価値尺度として機能するだけであるのに、現実に支払わなければならない限りでは、貨幣は絶対的商品として現われるという関係は、支払手段としての貨幣の機能に含まれる「媒介されない矛盾」(K. I, SS. 151 - 2. ㊦(1) 390 - 1 頁, ㊧(1) 180 頁, ㊨(1) 178 頁)と呼ばれる。

手形の裏書譲渡関係それ自体、支払手段の流通関係である。そして、諸支払は、手形形態——これは相殺に用いられる——でか、現実の支払手段形態でか、何れにせよ、支払手段の形成に依存する。もともと買い手は、自分が商品を貨幣に転化させるまえに、貨幣を商品に再転化させたのである。すなわち、商品の、第一の変態W—Gがなされるまえに、第二の変態G—Wをなしたのである。「その商品の第一の変態はあとからはじめて実行されるのである。」(K. I, S. 150. ㊦(1) 389 頁, ㊧(1) 178 頁, ㊨(1) 177 頁) 第一の変態が支払期限に間に合わなければ、債務者は彼の持ち物の強制売却を待たねばならない。

他方、貨幣取引機関であり、諸支払の集中、決済の場としての銀行には、ほかならぬ貨幣取引に媒介されて、貸付可能資本が形成されている。

Ⅲ 「信用と架空資本」論への上向と「平均利潤を生む資本」論に内含する諸関係への下向と

——その2. 貨幣取引資本と信用と——

資本の商品化論、資本としての商品、または商品としての資本論を基礎に、「信用と架空資本」論は、支払手段の生産関係と貨幣取引資本の生産関係とへの下向と、これからの上向にはじまる。ここで支払手段の生産関係および貨幣取引資本の生産関係というのは、現実の流通過程でのそれである。

流通過程に、現実の流通過程と独特の流通過程とがあるように、支払手段としての貨幣の機能に、現実の流通過程でのそれと独特の流通過程でのそれとがある。信用制度というのは、言葉を代えれば支払手段の制度であるが、これは現実の流通過程でのそれと独特の流通過程でのそれとの両側面においてとらえられなければ

ばならない。現実の流通過程と独特の流通過程とは相互媒介の関係にあるが、まへの側面が基礎的である。独特の流通過程は現実の流通過程なしにはありえない。ところが、現実の流通過程のほうは独特の流通過程なしにも、ありうる。信用制度の自然発生的な基礎、信用の本来の基礎、としての支払手段の生産関係は、現実の流通過程でのそれである。貨幣取引業務にも現実の流通過程における独特の流通過程におけるとがある。独特の流通過程におけるというのは、貸付貨幣資本移動にまつわる貨幣取引、そして利子つき資本として投下さるべく豫定された資本の投下部面である擬制資本運動にまつわる貨幣取引、である。これは、現実の流通過程での貨幣取引、すなわち、信用制度の他方面は、貨幣取引業の発展に結びついているというばあいの貨幣取引から、区別されなければならない。

平均利潤を生む資本の生産関係なしに、独特の種類の商品、利子つき資本はないように、資本の現実の流通過程なしに、資本の独特の流通過程はない。しかし、利子つき資本としての利子つき資本は、独特の流通過程にのみ、かかわる。他方、信用制度は、そして信用、架空資本は、両流通過程にかかわる。支払手段としての貨幣の機能の発展関係において、信用制度は存する。そして、他面、信用制度は貨幣取引業の発展に結びついている。

「信用制度の他方面は貨幣取引業の発展に結びついており、この発展は、当然、資本主義的生産のなかでは商品取引業の発展と同じ歩調で進んで行く。すでに前の篇(第19章)で見たように、事業家の準備金の保管、貨幣の受け払いや国際的支払の技術的操作、したがってまた地金取引は貨幣取引業者の手に集中される。この貨幣取引業と結びついて、信用制度の他方面、すなわち利子つき資本または貨幣資本の管理が、貨幣取引業者の特殊な機能として発展する。貨幣の貸借が彼らの特殊な業務になる。彼らは貨幣資本の現実の貸し手と借り手とのあいだの媒介者の役をするようになる。一般的に言えば、この面から見た銀行業者の業務は、貸付可能な貨幣資本を自分の手中に大量に集中することであり、したがって個々の貨幣の貸し手に代って銀行業者がすべての貨幣の貸し手の代表者として産業資本家や商業資本家に相対するようになる。彼らは貨幣資本の一般的な管理者

になる。他方、彼らは、商業界全体のために借りるということによって、すべての貸し手にたいして借り手を集中する。銀行は、一面では貨幣資本の集中、貸し手の集中を表わし、他面では借り手の集中を表わしている。銀行の利潤は、一般的に云えば、自分が貸すときの利子よりも低い利子で借りるといふことにある。」(K.Ⅲ, S.S. 415 - 6, ㊦(10) 131 - 2 頁, ㊦(4) 505 - 6 頁, ㊦(3) 501 - 2 頁)

銀行は、貨幣取引業務と貨幣貸付業務とを併せ営む。そして、貨幣取引業務が、銀行の自由に処分できる貸付可能資本を媒介する。

「銀行は産業資本家たちの出納係だから、銀行の手中には、各個の生産者や商人が準備金として保有する貨幣資本や彼らのもとに支払金として流れてくる貨幣資本が集中する。こうして、このような準備金は貸付可能な貨幣資本に転化する。このようにして、商業世界の準備金は、共同の準備金として集中されるので、必要な最小限度に制限されるのであって、もしそうでなければ貨幣資本の一部分は準備金として寝ているであろうが、その部合も貸し出されて、利子つき資本として機能するのである。」(K. Ⅲ, S. 416. ㊦(10) 132 頁, ㊦(4) 506 頁, ㊦(3) 502 頁)

資本の再生産過程は直接的生産過程と流過程との統一であり、資本はその運動過程において、変態 $W' - G - W$ を通らなければならない。そしてこの場合、
「貨幣が流通手段として機能するか支払手段として機能するかは、商品交換の形態によることであって、どちらの場合にも、資本家は絶えず多くの人々に貨幣を払い出し絶えず多くの人々から貨幣の支払をうけなければならない。このような貨幣支払や貨幣収納の単に技術的な操作は、それ自身労働であり、この労働は、貨幣が支払手段として機能する限りでは、差額計算や決済行為を必要にする。この労働は、それが一つの特殊な部類の代行者または資本家によって残りの全資本家階級のために行なわれることによって、短縮される。」(K.Ⅲ, S. 328. ㊦(9) 339 頁, ㊦(4) 394 頁, ㊦(3) 391 頁)そして、この貨幣支払や収納の単に技術的な操作の代行者として、銀行はあらわれる。銀行は、貨幣の貸借と信用の取扱業者であるまゝに、産業者や商人たちの出納代理者であり、貨幣取引業者である。

銀行預金は、各方面から銀行に流れこみ、銀行が自由に処分できる貸付可能資

本は、いろいろな仕方で形成される。

銀行に預金される産業資本家たちの貨幣資本としては、「購買または支払手段の準備金、蓄蔵貨幣の第一形態——これは絶えず流通に流れこみ、絶えず流通から帰ってくる——」が、そして「貨幣形態で休んでいてさしあたりは運用されていない資本の形態、蓄蔵貨幣の第二形態——未投下の蓄積貨幣資本はこれに属する——」が、挙げられる。この蓄蔵貨幣そのものによって必要とされるその「保管や記帳」、そしてこれに結びついで、「買うときの貨幣の支出、売るときの収納、支払金の支払と領収、諸支払の決済など、……すべてこれらのことを貨幣取引業者は最初はまず商人や産業資本家の単なる出納代理人として行なうのである」(K. III, S. 331. ㊸(9) 345 頁, ㊸(4) 397 - 8 頁, ㊸(3) 395 頁)

産業家や商人のもとでなされなければならない貨幣流通の純粋に技術的な諸操作が独立して、一つの特異な資本、貨幣取引資本、銀行業資本の機能となり、この資本がそれを自分に特有な操作として営むとき、それ自身が資本のための労働と諸費用とをなす貨幣支払や貨幣収納の技術的諸操作は、短縮される。

しかし、それとともに、資本のために、しかし銀行に預金している産業家や商人たちの、個々の立場からではなく、総体の立場からの、したがって総顧客にたいする銀行の立場からの、必要準備金は必要最小限に制限され、預金された産業家や商人たちの蓄蔵貨幣は、銀行の準備金と銀行が自由にする貸付可能な資本とに分裂する。しかし、蓄蔵貨幣の第一形態と第二形態との、保管、記帳、そして、これの分解と再形成とに直結する出納、決済だけが、産業資本家や商人たちのための出納代理人としての銀行業務のすべてではない。

展開された信用制度のもとでは、蓄蔵貨幣の第一形態と第二形態とは、または、その多くの部分は、利子つき資本たるべく豫定された資本にとっての投下部面としての擬制資本市場に、直接いくことになるかも知れない。他方、銀行のこの市場への参加も進むであろう。貨幣取引、貨幣取引手段の発展とともに、産業家や商人たちの、蓄蔵貨幣の第一形態と第二形態だけではなく、むしろ現在流通必要の貨幣資本が銀行に預金され、購買または支払手段の、現金での絶え間のない出

し入れがなされるとしても、貨幣出納の集中、貨幣速度の増大は、貨幣数量を補い、流通に必要な貨幣量、といっても預金者の、個々の立場からではなく、総体のまたは銀行の立場からの、流通必要貨幣量は制限され、預金された貨幣の一部は、銀行の貸付可能の貨幣資本となる。そして、貨幣取引の発展とともに、貨幣取引手段、銀行手形、預金が、支払手段として流通し、流通貨幣資本機能を営むに至る。貨幣取引手段それ自身の支払手段としての流通関係は、個々の産業家や商人たちの立場からの、そして個別資本の運動の総和としての社会的総資本の立場からの、流通必要貨幣量を補い、預金者総体の立場からの、従って銀行の立場からの、流通必要貨幣量は圧縮される。貨幣取引手段の貨幣としての流通ということによって、流通必要貨幣量は圧縮され、信用が貨幣を流通の外に追いあげ、銀行準備と銀行が自由にする貸付可能の資本、信用は形成される。

商業手形の生成とその流通領域の拡大のうちに、貨幣流通技術の発展は看取されるが、「そのことのうちに内在する貨幣的契機が、專業に営む貨幣取引技術の上に映しだされ、——純粹に自己を貨幣取引業者による貨幣手形にまで蛹化させてゆく——。それはまた、貸付業者としての立場からは、貸付の手段ともなるのである。」¹⁾

1) 高木暢哉『信用制度と信用学説』8—9頁。

しかし、銀行が自由にできる貸付可能な貨幣資本の形成は、銀行が産業資本家や商人たちの出納係であることによるだけではない。「貨幣資本家たちの預金」(K. III, S. 416. ㊦(10) 132頁, ㊦(4) 506頁, ㊦(3) 502頁)が、銀行の貸付可能資本を形成する。他方、資本の流通との絡み合いにおいて所得の流通はある。そして諸個人の「貨幣貯蓄や一時的な遊休貨幣」は銀行に預金されて、「一つの貨幣力」を形成する。そして「少しずつしか消費できない収入も銀行に預金される。」(K. III, S. 416. ㊦(10) 132—3頁, ㊦(4) 506頁, ㊦(3) 502—3頁)そして、貨幣取引と貨幣取引技術との発展につれて、産業資本家や商人たちの流通必要の貨幣資本にみたように、諸個人の、現在流通必要の所得の貨幣形態も銀行に預金され、振替決済というこ

とによって預金形態でその機能をなすに至る。

銀行は、貨幣取引業者として、資本や所得の貨幣形態の管理者であるばかりでなく、信用の取扱の業者として、貸付可能資本の管理者でもある。産業家や商人たちの、そして諸個人の出納代理の業務に媒介されて、貨幣資本家たちの預金とともに銀行が自由に処分できる貸付可能の資本または信用は形成され、貨幣取引の元来の機能に貸借の機能や信用の取扱いが結合する。

銀行が自由に処分できる貸付可能の資本のうち、はじめから貸付可能の資本であるのは、銀行に預金された貨幣資本家たちの資本だけである。貨幣取引は、諸個別資本や諸個人の立場からは蓄蔵必要の貨幣量を圧縮して、預金者総体の立場からは蓄蔵必要でない貨幣に転形せしめる。そして貨幣取引と貨幣取引手段との発展は諸個別資本や諸個人の立場からは流通に必要な貨幣量を圧縮して、預金者総体の立場からは流通に必要な貨幣量を形成せしめる。

「信用・銀行制度は産業資本家や商業資本家に、社会のあらゆる処分可能な、そして潜勢的な、すでに活動的に使用されているのではない資本を用立てるのであって、かくしてこの資本の貸し手も充用者も、この資本の所有者または生産者ではない」(K. III, S. 620. ㊦(10) 548 - 9 頁, ㊦(5) 783 頁, ㊦(4) 763 頁) かくして、貸借の機能、信用の取扱い、資本の配分機能は、信用・銀行制度のもつ一つの特異な社会的機能であるが、しかし、「あらゆる処分可能な、潜勢的な、すでに活動的に使用されているのではない資本を」といっても、預金者個々の立場からすれば、貸付可能でない、蓄蔵必要の、また反対に流通必要の、資本や所得の貨幣形態をも、預金者総体の立場からは「処分可能な、潜勢的な、まだ現実には使用されているのではない、流通に必要なない」貨幣または貨幣資本に転形し、かくして、貸付可能の資本または信用が形成されることに注意されなければならない。

そして、貸付といっても、本来の事業信用には手形割引その他いろいろな形態があるとともに、銀行により取扱われる信用にも、銀行業者自身の手形その他いろいろな形態がある。¹⁾

1) 「貸付(われわれはここでは本来の事業信用だけを問題にする)は、手形の割引——

手形が満期になる前に貨幣に換えること——いろいろな形の前貸によって行なわれる。すなわち、対人信用による直接前貸、各種の利子つき証券や国債証券や株式にたいする担保前貸、ことにまた積荷証券や倉荷証券やその他の商品所有証書にたいする前貸によって行なわれ、預金を越える当座貸越などによって行なわれる。」(K. III, S.S. 416 - 7. ㊦(10) 133 頁, ㊦(4) 507 頁, ㊦(3) 503 頁)「銀行業者が与える信用は、いろいろな形で与えられることができる。たとえば、他の銀行あての手形、他銀行あての小切手、同種の信用開設、最後に、発券銀行の場合には、その銀行自身の銀行券によって与えられる。……しかし、銀行業者はそのほかのあらゆる形態の信用をも取り扱うのであって、彼が自分に預金された現金貨幣を前貸するばあいでもそうである。」(K. III, S. 417. ㊦(10) 133 頁, ㊦(4) 507 頁, ㊦(3) 503 頁)

IV 信用、架空資本

—— 信用、架空資本、を支えるものと

資本主義的生産様式の内的編成と ——

資本主義的信用制度は、商業信用と銀行業信用とから形成される。そして、信用、架空資本が、資本主義的生産様式一般を特徴づける。商業流通部面には、つねに新たに商業信用または商業信用貨幣が形成され、流通し、消えて行く。これを基礎に、これに代置される関係で、そしてこれに並んで、銀行業信用および銀行信用貨幣は形成される。

二つの信用形態のちがいは、そこで貸付けられる資本は商品資本であるか、商品としての資本であるか、にある。貸付けをうけた者は、後日返済しなければならない。返済が、借手のもとにおける、彼の生産物、彼の商品の、価値、価格の実現に依存すること、どちらの信用形態においても同じである。違いは、そこでの貸付けが価格の実現が後日に延期された商品譲渡であるか、利子つき資本形態における資本の前貸であるか、にある。

しかし、商品としての資本が商品としての資本であるのは、それが独特の流通過程にあるかぎりでのことである。銀行業者の与える信用も、独特の流通過程を出て、現実の流過程程に入れば、商品としての資本であることを止める。そして、

それは——ここでは本来の事業信用に着眼する——平均利潤を生む資本としての機能関係に入る。

商業信用において、貸付けられる資本は貸手にとっては、普通の商品の形態にある資本、商品資本、である。借手にとっては、それは、直接的に、生産諸要素の形態にある資本、生産資本——産業家のばあい——、または、普通の商品の形態にある資本、商品資本——商人のばあい——、である。それは、貸手にとっても、借手にとっても、資本、平均利潤を生む資本である。商業信用に利子関係は結合する。しかし、商業信用に利子は不可欠の要素ではない。売り手にとって商品の、価値、価格の実現のための信用である以上、利子は商業信用に必然の要素ではない。事実、販路確保が目標であるかぎり、利子どころではない。貸付けられるものは、資本であり、平均利潤を生む資本である。しかし、利子つき資本の形態にある資本ではない。他方、銀行業信用において、貸付けられる資本、貸付けられる信用は、利子つき資本である。しかし、独特の流通過程を出て、現実の流通過程に入れば、商品としての資本であることを止め、平均利潤を生む資本としての機能関係に入る。資本または信用の貨幣形態は、流通資本としての貨幣資本となる。本来の貨幣信用ではなく、貸付資本のその他の形態にあっては、独特の流通過程を出れば、直接的に生産資本または商品資本、あるいは流通のための諸設備となる。どの貸付形態においても、返済が借手のもとにおける、資本の還流に依存することというまでもない。

しかし、ここで問題なのは、生産諸要素や流通諸設備ではなく、信用の流通形態、支払手段として貨幣がうけとる特有の存在形態を支えるものと信用の資本としての性格とである。

生産者や商人たちの手形は、その満期支払日まではそれ自身が再び支払手段として流通し、これが本来の商業貨幣をなす。手形が債権債務の相殺によって決済され、貨幣への最終的転化が生じない限り、貨幣はただ観念的に計算貨幣または価値尺度として機能するにすぎない。この関係は、手形はその限りで絶対的に貨幣として機能する、と表現される。債務差額が現実に貨幣で清算されなければならない限り、貨幣は流通手段としてではなく、絶対的商品として現われる。

貨幣取引業者の、そして銀行の、貨幣約束についても、関係は同じである。銀行券などは、金属貨幣なり国家紙幣なりの貨幣流通にもとづいているのではなく、手形流通にもとづいているのである。

こうして信用は、支払手段として貨幣がうけとる特有の存在形態として、商品の流通からの離脱の過程を媒介する。

大切なことは、労働生産物の物質代謝、生産と消費との絶え間のない相互媒介の關係に支えられ、これの表現として、資本の再生産過程の流動性、資本の運動、商品の変態、貨幣の運動、そして信用流通、信用貨幣運動は存在するという、ことである。

生産と消費との「社会的物質代謝を媒介する諸商品の形態変換または変態」(K. I, S. 119. ㊦(1) 321 頁, ㊧(1) 138 頁, ㊨(1) 136 頁), 「労働生産物の物質代謝がそれによって行なわれる形態変換, W—G—W」(K. I, S. 128. ㊦(1) 342 頁, ㊧(1) 151 頁, ㊨(1) 149 頁) そのことの表現として、貨幣の運動はある。そして、「ある一つの商品の形態変換は、つねに二つの商品の、普通の商品と貨幣商品との、交換において行なわれる。」(K. I, S. 119. ㊦(1) 321 頁, ㊧(1) 139 頁, ㊨(1) 136 頁) 「貨幣が流通手段として機能するか支払手段として機能するかは、商品交換の形態によることである」(K. III, S. 328. ㊦(9) 339 頁, ㊧(4) 394 頁, ㊨(3) 391 頁) しかして、ここでは、商品交換の形態における差異が問題である。

再び、商品流通の、というよりも信用流通の発端に立ち帰って考察しよう。さきに触れたように、将来の貨幣が現在の商品の持ち手変換をひき起こすという表現関係、信用に媒介されての商品の流通からの離脱という表現関係において、すでに、信用流通は逆の表現形態をうけている。信用または流通する信用の形成は、価格の実現を後日に延期された形態での商品流通の表現でしかないのに、逆に商品流通が、信用の、または流通する信用の、結果として表われる。

信用に媒介されての商品の流通からの離脱という表現は、信用の一般流通関係のもとでは、完成されてみえる。関係はあたかも、流通手段としての貨幣の機能における表現形式——「貨幣運動は商品流通の表現でしかないのに、逆に商品

運動はただ貨幣運動の結果としてのみ現われる」——に類似する。

貨幣取引業者の、そして銀行の、貨幣約束は、それがほかならぬ貨幣取引業者の、そして銀行の、貨幣約束であるということに起因して、その絶対的に貨幣としての機能関係において、商業手形より優れている。それは、同じく流通する信用表章といっても、商業貨幣より—そう広い流通領域に流通する信用表章として、資本の流通を、そして所得の流通を媒介する。

貨幣取引業者の、そして銀行の、貨幣約束の、絶対的に貨幣としての機能関係を支えるものは、産業家や商人たちの、そして諸個人の、出納代理人としての貨幣取引業務であり、そこでの出納業務、債権債務の相殺、またはこれの反転としての銀行準備形成関係、に表現される再生産の流動性である。商業信用にあっても、これの発生関係を、そして、これの流通する信用表章関係、裏書譲渡による債権債務相殺関係、すなわち支払手段としての流通関係を、支え、に表現されるものは、再生産の流動性である。

再生産と信用または信用通貨とは、相互媒介の関係にある。しかし、注意しなければならないことは、基礎的側面は再生産の流動性にあるということ、再生産の流動性が対象化されての、信用または信用貨幣存在であるということ、である。

そして、債権債務の相殺の範囲と深度、それに対象化され、それに表現される再生産の流動性の範囲または密度の相違が、流通する信用表章自体の、流通能力における差異として現わされる。商業信用または商業貨幣関係におけるよりも、より広い再生産過程の流動性が対象化されての、銀行業信用および銀行貨幣関係である。

さて、支払手段の生産関係は、支払手段の準備金の形態での蓄蔵貨幣を媒介する。信用および信用貨幣流通は、貨幣を流通の外に追い上げ、支払手段の準備金は形成される。再生産過程の流動性が、信用および信用貨幣流通、そして支払手段の準備金存在、を与え、に表現される。そして、支払手段の準備金は、支払手段に従属する概念である。

「支払手段としての貨幣の発展は、債務額の支払期限のための貨幣蓄積を必

要にする。独立な致富形態としての貨幣蓄蔵はブルジョア社会の進歩につれてなくなるが、反対に、支払手段の準備金という形では貨幣蓄蔵はこの進歩につれて増大するのである」(K. I, S. 156. ㊤(1) 401 頁, ㊦(1) 185 頁, ㊨(1) 183 - 4 頁)

「形態的な組織や集中という点からみれば、……およそ資本主義的生産様式がつくりだす最も人工的な最も完成された産物」(K. III, S. 620. ㊤(10) 548 頁, ㊦(5) 782 頁, ㊨(4) 763 頁) である銀行制度のもとでは、準備率、準備金を基礎に、信用または銀行貨幣創造関係はえがかれ、支払手段の準備金は支払手段に従属する概念であるという関係は、逆に表現される。しかし、すぐあとにみるように、創造さるべき銀行業信用または銀行貨幣量を規定するものは、銀行準備の大きさにあるのではない。

準備金なしの、銀行業信用および銀行貨幣関係はありえない。これは、信用による貨幣の流通からの追い出し——生産が流動的であるあいだは、……信用は……富の社会的形態として、貨幣を追い出してその地位を奪ってしまう」(K. III, S. 588. ㊤(10) 480 頁, ㊦(5) 739 - 740 頁, ㊨(4) 721 頁)——関係の表現として、とらえられなければならない。

さて、信用はいかなる資本を追加的に形成するか。

銀行は、信用および信用貨幣創造関係において、現実の流通過程に、流通する信用表章、流通資本としての貨幣資本形態における富形態を創造し、貴金属そのものの独占を制限するとともに、銀行業者自身のために、利子、利潤、をもたらし資本を創造し、高利を排除する。「銀行がその地下室にある金属準備によって保証されていない銀行券を発行する限りでは、この銀行は価値表章を創造するのであって、この表章は単に流通手段を形成するだけではなく、この銀行にとってはこの無準備銀行券の名目額だけの追加の——架空だとはいえ——資本をも形成するのである。そして、この追加資本は銀行のために追加利潤をあげるのである」(K. III, S. 557. ㊤(10) 416 頁, ㊦(5) 697 頁, ㊨(4) 680 - 1 頁)

同じ関係は、預金通貨とこれにたいする準備との関係、その他銀行業手形に、妥当する。

銀行業に前貸された資本は、直接に貸付可能資本ではない。また、本来的に、支払手段の準備金ではない。貨幣取引業務が銀行の自由にする貸付可能資本を媒介し、貨幣取引業の元来の機能に貸借や信用の取扱いが結びつく。商品としての資本への需要が、これを具体化する。かくして、預金銀行にあっては、現金的信用創造または振替的信用創造が、中央発券銀行にあっては、銀行の銀行としての業務に側していえば預金銀行に類似の信用創造が、発券業務に側していれば銀行券創造が、具体化する。銀行の、信用の取扱関係に、さきに展開された資本の商品化、「資本としての商品」または「商品としての資本」関係は、具現する。

より深く掘り下げられた場合、剰余労働の対象化されたものとして、利子と利潤——平均利潤——とは異なるところはない。利子は利潤の一部であって、全部ではない。この単なる量的区別が質的区別に転じての、利子と企業者利得とである。しかし、利子は、銀行業に前貸された資本、銀行業自己資本に対する関係において、再び利潤に形態化される。利子収入その他貨幣取引収入から、預金利子、従業員賃金その他、貨幣取引業務と貨幣貸付業務との、すなわち銀行業務の、ための諸経費を差引いた残りの部分が、銀行業自己資本に対比されるとき、銀行業利潤率または銀行業利潤なる概念は生ずる。銀行業利潤内部留保は、銀行業自己資本を追加的に形成する。

しかし、信用の本来の基礎は商業信用であり、その流通用具手形は本来の信用貨幣の基礎である。しかして、創造された信用または信用貨幣量と支払手段の準備金との対応関係における追加資本形成関係は、すでに、商業信用または商業貨幣創造関係について、いえる。但し、商業信用では、支払手段と支払手段の準備金との関係は転倒されては表現されない。そして、流通する信用表章、手形は、一つの擬制的富であり、架空資本であるとしても、手形債務者のもとに追加される資本は、架空資本ではない。そして、商業信用においてそうであるが、銀行業信用にあっては、つまりは、資本の生産関係、労働力と生産手段との結合関係に媒介されての、信用、架空資本である。銀行業信用にあっては、借手である産業者や商人たちに追加されるものは、つまりは、架空資本ではない。この追加資本の、

利潤——平均利潤——生産關係が、信用、架空資本、を支え、利子と企業者利得とへの利潤の分割を支え、銀行業利潤を支える。

創造さるべき信用または信用貨幣量の大きさを規定するものは何か。商業流通部面には、つねに新たに商業信用または商業信用貨幣が形成され、流通し、消滅していく。これを基礎に、これに代置される關係で、そしてこれに併存して、銀行業信用は形成され、銀行信用貨幣はでていく。

「流通部面はつねにどれだけの貨幣を吸収するか」の、すなわち「絶えず流通部面に棲息していて、絶えずここで働きまわっている」貨幣量を規定するものは何かの (K. I, S.S. 130 - 1. ㊦(1) 346 頁, ㊧(1) 153 頁, ㊨(1) 152 頁), 貨幣流通の諸法則は、資本の流通過程に妥当する。「産業資本の個別的循環過程のただ一部をなすだけの産業資本の流通過程は、一般的な商品流通のなかの一連の過程を表わすにすぎない限りで、前に(第一部第三章)展開された一般的な法則によって規定されている」(K. II, S. 116. ㊦(5) 216 頁, ㊧(3) 138 頁, ㊨(2) 130 頁) 資本の流通過程に「一般的商品流通の法則が妥当するのは、ただ資本の流通過程が単純な流通行程の系列をなすかぎりでのことであって、これらの流通行程が個別資本の循環の機械的に規定された諸段階をなす限りで、ではない。」(K. II, S. 117. ㊦(5) 217 頁, ㊧(3) 139 頁, ㊨(2) 130 頁) 同じ關係は、さらに加えては、そこでの流通用具が架空資本である限りでではなく、信用流通に妥当する。しかし、単純な貨幣流通のところで論証された法則は、流通する信用表章に支配する¹⁾としても、信用、架空資本の諸形態、商品としての資本運動、信用、架空資本と資本の再生産とのつながり等々は、資本流通の諸現象にも他のすべての商品流通にも共通な、そして資本主義的信用流通の諸現象にも他のすべての貨幣流通にも共通な、商品流通上の諸変態の絡み合いからは明らかにならないのであって、別の研究方法を必要とするのである。

- 1) 「すでに単純な貨幣流通を考察したところ(第一部第三章第二節)で論証したように、現実に流通する貨幣の量は、流通の速度と諸支払の節約とを与えられたものとして前提すれば、諸商品の価格と諸取引の量とによって規定されている。同じ法則は銀行券

流通の場合にも支配する。」(K. III, S. 538. ㊶(10) 375 頁, ㊷(5) 668 頁, ㊸(4) 654 頁)
「銀行券の流通は、イングランド銀行の意志にはかかわりないように、これらの銀行券の兌換可能性を保証する地下室内の金準備高にもかかわりない。」(K. III, S. 541. ㊶(10) 382 頁, ㊷(5) 673 頁, ㊸(4) 659 頁) 「流通貨幣——銀行券と金の量に影響するものは、ただ取引そのものの要求だけである。」(K. III, S. 541. ㊶(10) 382 頁, ㊷(5) 674 頁, ㊸(4) 659 頁) 「銀行はそのほかにも資本を創造する手段をもっている。」(K. III, S. 558. ㊶(10) 418 頁, ㊷(5) 698 頁, ㊸(4) 681 頁) 「銀行は信用および資本を創造する。」(K. III, S. 558. ㊶(10) 419 頁, ㊷(5) 698 頁, ㊸(4) 682 頁) そして法則は、銀行券だけでなく、その他、銀行信用であるか商業信用であるか、何れにせよ、信用および流通する信用表章、一般に、妥当する。

利子つき資本または利子つき資本たべく豫定された資本にとっての、投下部面としての架空資本形態を捨象しても、信用は、貨幣、流通資本としての貨幣資本、利子つき資本としての貨幣資本として、富の社会的形態——架空だとはいえ——を形成する。信用、架空資本が、資本主義的生産様式一般を特徴づける。信用は貨幣を流通の外に追い上げ、それに代る。それとともに、支払手段としていろいろな存在形態を信用はうけとる。金属貨幣は、支払手段の準備金、中央銀行の金属準備にまで、形態化される。預金通貨、手形は、銀行券をも「貨幣」として資本流通の外に追い上げ、さらには、支払手段と支払手段の準備金との時間的先後関係の転倒された、最も完成された形態、ハイパワード・マネーといわれるものは、いまや中央銀行預金にまで形態化される。他の経済学的範疇におけると同じく、流通必要貨幣、貨幣としての貨幣、蓄蔵貨幣、支払手段も、資本関係の発展とともにそのうけとる表現形態は多様である。しかして、兌換銀行通貨の不換銀行通貨への転化は信用の一その深化をものがたる。しかし、そこで支払手段として貨幣がうけとるいろいろな特有な存在形態、いろいろな、信用、架空資本形態は、資本主義的生産様式の内的編成とのたしかなつながりのもとにとらえられなければならない。